



西郷南洲顕彰館所蔵



明治150年関連施策展示

キヨツノーネの描いた西郷どん

2018/3/27 ~ 4/22

解説シート



独立行政法人国立印刷局

お札と切手の博物館

キヨツソーネの描いた西郷どん

西郷隆盛公（以下西郷）は、写真を一枚も残さなかったという。

しかしながら、西郷の容貌は広く知られている。それは、多くの像や肖像画が存在しているためである。

それらの肖像のうち本人の特徴をよく捉えているとされているのが、キヨツソーネが描いた肖像画である。

この肖像画はコンテといわれる画材を用いて描かれたもので、残念ながら実物は焼失してしまったが、それを撮影した写真が残っている。

キヨツソーネは、イタリア人の銅版画師であり、海外の証券印刷会社で紙幣の原版彫刻に携わっていた。その会社では日本のお札を製造しており、キヨツソーネはそれに携わっていたことからお雇い外国人として明治8年から印刷局で紙幣製造技術を教授することとなった。

キヨツソーネが西郷の肖像画を描いたのは、明治16年のことで、西郷はすでに故人となっていたため、本人を目の前にして肖像画を描くことはできなかった。

そのため、参考としたのは西郷の弟、西郷従道と従兄の大山巖である。



西郷隆盛肖像
西郷南洲頭影館所蔵

西郷隆盛（1827-1877）

明治維新の政治家。木戸孝允・大久保利通とともに維新の三傑と呼ばれる。

薩摩藩下級藩士の家に生まれ、薩摩藩主島津斉彬やその異母弟久光の下で国事に奔走する。薩長同盟や江戸無血開城に関与。明治政府下では、参議として廃藩置県を断行する。明治4（1871）年の岩倉使節団の出発後は留守政府の責任者となるが、明治6年に下野する。明治10年の西南戦争において自刃。

肖像画を描くにあたって、顔の上半分が従道、下半分が大山のモンタージュと言われている。

キヨツソーネは、元々母国イタリアで美術絵画の複製版画を製作していた。その技術力は、作品が入賞するほどで、実物を版画で再現する技術には定評があった。彼がお札の原版彫刻技師へと転向したのちも、その再現性の高さは、お札の肖像彫刻に生かされることとなる。

また、こんなエピソードが伝わっている。キヨツソーネは、来日まもなく明治8年発行の帯型煙草印紙の原版彫刻を手掛けたが、十分な製作期間が確保されていなかったのか、モチーフである煙草の葉の仕上がりに納得がいかず、明治16年発行の印紙製造の際には、栽培地から苗を取り寄せ自ら育ててスケッチしたという。このように製品を手掛ける際に入念に実物の観察を行っていたことが知れる。このことからキヨツソーネが西郷の肖像画を描くときに縁者を参考としたのは極めて自然な選択であったと言える。

さらに肖像画の再現性を高くしたのは、西郷本人をよく知る人物の存在であろう。その人物は、当時の印刷局長得能良介である。得能は、薩摩藩の出身で、西郷や大久保利通、松方正義などといった薩摩藩出身の明治政府の中心人物たちと既知の間柄であった。また、得能の娘清子は西郷従道に嫁いでおり、得能自身が西郷の親族でもあった。

このように、キヨツソーネは、一番身近に西郷を知る人物がおり、本人



西郷従道写真
出典：近世名士写真



大山巖写真
出典：近世名士写真

に関する情報が得られるとともに製作にあたってのアドバイスも受けられる環境にあったのである。

お札の肖像彫刻では見た目を似せるだけではなく、その人物の人となりも表現することが肝要であるという。キヨツソーネは、当然これらの西郷の親族の者に西郷の人物像についても聞き取りをしたであろう。そうして製作された肖像画は、本人に最も似ていると言わしめ、これ以後の西郷の肖像の元となったのも、もっともなことである。

受け継がれる肖像彫刻

明治 14(1881) 年以降、日本のお札には肖像が採用し続けられ、お札の原版彫刻を行う際には必ず肖像画（コンテ画）が描かれる。そのため、キヨツソーネ以降も原版彫刻に携わる職員（工芸官）は代々肖像画を描く。巧者の一人である大山助一は、キヨツソーネの弟子としてヨーロッパ式の原版彫刻技術を学ぶが、明治 18 年に印刷局の官費留学生としてアメリカの証券印刷会社にてアメリカ式の彫刻技術を学んだ。そこで才能を開花させ、「ジャパニーズオオヤマ」の名を広く知らしめた。



大山助一作 凹版画「西郷従道」



大山助一作 凹版画「大山巖」